

美しき
月曜日の
人々

motohiko fuma

夫馬基彦

講談社

美しき月曜日の人々

一九九四年三月三〇日 第一刷発行

著者——夫馬基彦

©Moonhiko Fuma 1994, Printed in Japan

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二—二一

郵便番号 一一二—〇一

電話——出版部 〇三—五三九五—三五〇四

販売部 〇三—五三九五—三六二二

製作部 〇三—五三九五—三六一五



印刷所——凸版印刷株式会社

製本所——和田製本工業株式会社

定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作所宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸局文芸図書第一出版部宛に願います。

夫馬基彦(ふま・もとひこ)

一九四三年愛知県生れ。早大仏文科中退。フランス・インド等を放浪後、七七年「宝塔湧出」で中央公論新人賞。その後芥川賞候補三回。著書は、小説に『夢現』(中央公論社)、『金色の海』『紅葉の秋の』『菊とヒツピーと孤独』(以上福武書店)、『風の塔』(講談社)ほか、エッセイに『美術館のある町へ』(創隆社)など。早大・日大芸術学部講師。

目次

ブリキの男爵 5

青山月見図 45

桜の木の下ソフト帽 99

天地の間で 135

北斎のごとく 173

秋茄子 217

あとがき 254

装
幀
菊
地
信
義

美しき月曜日の人々

ブリキの男爵

かつてこの世の中には爵位というものがあつたそうだ。公侯伯子男というあれである。公はデュークで侯はマルキ、伯はカウント又はコントで、子はヴァイカウント、男はバロン。何となく英仏語いりみだれてしまうのは、そもそもそれらが彼らの国の古き良き物語や映画などを通じて頭に入ってきたためで、もとより身の周りの現実感としては全くない。

尤も、日本人でも私の親の世代くらいになるとかなりの現実感があるらしく、かつて私の母などは「あたしの歌のお仲間の成瀬さんは今でも犬山城主で、確か元子爵か何かよ」とか、「徳川さんはもちろん公爵だわ。何といつても御三家の筆頭だでねえ」なぞと、徳川さんに至っては会ったこともないのに、いかにも尾張の庶民らしく得意気に口にしたものだ。で、生意気ざかりだった私の方も「コー・コー・ハク・シ・ダン」としたり顔に指折り数え、「だけど、犬山城主は所詮尾張徳川家の家老にすぎないし、石高も少ないから、

せいぜい一番下の男爵だったんじゃないかなあ」と言挙げしたりしたが、すると母は一旦小首を傾げたのち、「いや、男爵なんかは税金をちゃんと納めりゃ貰えたりするから、ありや大したことないわ。成瀬さんはやっぱり子爵だ」と嬉しげに言うのだった。

由来、私の中でも何となく、男爵は必ずしもやんごとなき方のみばかりではないらしいとの意識が、脳裡のどこかに植えつけられたのだが、いずれにせよ多額納税者であれしかるべき血筋の方であれ、「華やかな族」と称される方々になぞ、私の人生はその後もずっと無縁だったから、爵位といえばかのサド侯爵かドラキュラ伯爵、はたまたジャズのデューク・エリントンかカウント・ペーシーあたりを思い浮べるのが関の山だった。

実際、わが日本においては、爵位なるものが生じ存在したのが、明治以降太平洋戦争終了直後までのたかだか六十余年にすぎないから、そもそも歴史を超えての深層意識には残りにくいのだ。残るといふなら日本人にとってはむしろ、遙か聖徳太子の御世以来連綿として続いてきた位階制だろう。当初、太子によって定められたそれは冠を色で区分した十二階制だったそうだが、その後何回かの変遷は経たものの、ある意味では未だに残っている。神社や墓地へ行くとしばしば目にする「正一位」とか「正二位」などというあれである。あれは何となくおキツネさんか神主あたりを想像させ、少々面妖な気分にもなるが、といって格別反撥をおぼえるほどのこともなく、それこそ何となく「フム」なぞと肯いてしまったりする。

妙なものが、そういうものだ。理由は多分、人間とはどんな平等主義者でも、それこそ深層意識のどこかで、本来その種の区分や序列をほしがるものだという気がするからだろう。ひょっとしたら、古の太子はそれを見抜いておられたのである。

さて、私の知人にも太子と呼ばれる人がいて、その名を松山光徳太子という。彫刻というか造形美術をこととする人なので、名は一種のペンネームか雅号とも言えるのだが、来歴は相当古い。私と知り合ったのがもう二十数年も以前のことなのに、その時すでに彼はその名前で自己紹介した。

「やあ、松山コートクタイシです、どうもどうも。何だか妙な縁ですねえ」

単純な挨拶だったが、新宿の喫茶店の二階で言われた時、私は一瞬戸惑った。事前にその名前は知っていたのに、いざ眼前で生身の人物から堂々とそう名乗られると反応に困ったのだ。今ここに書いたように姓の方は普通に「松山」と漢字で頭の中に入ってきたのだが、名前の方は「光徳太子」と漢字でつなげるには何か抵抗がある。それこそ聖徳太子の文字とお札に刷りこまれているあの顎髭の長い謹厳高徳そうな顔とがすぐ浮び、眼前の確かに髭は口の周りにはやしているものの、ジーパンをはき、目のクリクリとした背の高い青年とはどうにもそぐわなかったからだ。おまけにチラと見えたところでは、この人、歳の割には頭がだいぶ薄く、頂上部が少しいわゆる河童頭風に丸く露出していて、申し訳な

いがある種のおかしみが漂う。

いきおい、この人はいったい本気なのか、そもふざけているのではないか、といった疑念が生じ、知らず知らず口もとがニヤついてくるのだが、さりとて相手は自分よりだいぶ年長の社会人である上、紹介者を通じてこちらから面会を申しこんだ関係である。ちなみにこのとき私は二十二歳の仏文科の学生であり、彼は三十歳だった。非礼なことなぞ出来ようはずがない。

で、私は口もとに出かかる笑いを何とか抑えつつ、しごく丁寧に初対面の挨拶をし同行者二名を紹介したのだが、すると太子は目の前の椅子にどっかと坐り、

「いやあ、カノジョとは思わぬ所で出会いましてねえ、すっかり話が弾んじゃったもんだから住所を交換したんですが、すると今度は突然東京でおたくから連絡が来て。話とってもぼくの方はひとりでハプニングをやっているだけなんだけど、ぼくは実は全学連支持なんですよ、ハッハッハ」

と男としては相当高音のテノールで、潤達に話し始めた。カノジョとは私たちの間の紹介者で、名を言えば誰もがホーッと声を上げる関西の有名国立大へ行っている私の高校時代の同級生だ。二人が出会ったのは岐阜市で開かれたアンデパンダン展の会場らしい。

「アンデパンダンというのはねえ」

と太子はだんだん手振り身振り目振りを混えつつ、声を高めた。目振りというのは、か

なり大きな丸い目を睜ったり瞬いたり細めたり時にキョトキョトさせたりするもので、目の色がやや赤みがかった茶色のせいもあってか、感情の動きがいかによく反映され、どうやら意外なほどナイーヴな性向の持主らしいとも思わせる個性的なものだった。

「元来フランス語だそうだからおたくらの方が詳しいだろうけど、美術の世界では要するに自由・無審査・無所属・平等ってことですよ。自由、独立、審査委員なんかなし！ 権威もダメッ！ すべて自由！ これでなくっちゃ。ね、そうだろ」

太子は高らかにそう宣言を下し、それから美術雑誌に掲載された彼の作品なるものを見せてくれた。それは『檻』と題され、実際に木材だか鉄パイプだかで作られた畳一畳分ほどの檻の中に、作者本人、つまり太子自身が入っているのだった。太子は目の前の姿と同じくジーパンにジャンパー姿で、檻の中で蹲まったり寝ころがったり、格子を掴んで目を見開いたりしていた。寓喩としてはおそらく「社会という檻の中の現代人」といった意味があるのだろうが、太子の表情には陰鬱さは全くなく、何枚かの写真はいずれもカメラの方を向いて両眼をクリクリと睜っていた。

「ははあ、面白いですなえ」

私は言いながら同時に微妙な気分だった。面白いには面白いが、何だかチガウような気もしたのだ。表現というのはこんな風に、分りすぎるような意味をいきなり赤裸々に提示するものじゃないんじゃないか。もっと切ったり塗ったり削ったり、あるいは味つけした

り煮込んだり整えたり装ったり、時にはボカしたり隠したりするものではないのか。そして少なくともどこかに美があるべきではないのか。そんな風に思っていたからだ。

ところが、太子は私の反応をどう受けとったのか、

「だけど、これで中々大変でねえ。何しろ檻が小さいもんだから、中で立つことも出来なきゃ気ままに動きまわることも出来なくて、疲れるのなんのって。だから一時間おきに外へ出てはバーツと走りまわったり、トイレへ行っと思っていきり小便したりするんですよ」と、

「走りまわったり」「トイレへ行っ」というくんだりでは本当に両腕を振って走る恰好をして見せたり、便器の前で胸を反らせていかにも晴々と放尿するさまをして見せるのだった。

おかげで、私と友人たちは笑い転げ、ともあれこの太子と名乗る人物の率直さと朗らかさを印象づけられたのだった。

それが出会いで、以降私たちの間につき合いが始まったのは、それから暫くして私の大学の学園祭の催しの一つにたまたま彼がゲストの一人としてやってきたとか、同じころ例のカノジョが関西から上京してきたため三人で会うことになったとかの事情もあるが、一番の理由は彼が八歳も年長にもかかわらず、ひどく率直に私を友人扱いたからだ。

例えば彼は気軽に電話してきては街へ散歩に連れ出したり飲みに連れ出したし、金がない時は私の下宿へやってきて、するめに冷や酒で学生のように飲んだりもした。行動パタ

ーンはとにかく若く、お茶の水の学生街をわざわざ歩いては全学連に新左翼、毛沢東について喋りまくっていたと思うと、一転して女とセックスについて、

「あのな、女とデートする時は先にマスカイと言ってから行った方がいいぞ。そうしないと気持が焦っちゃって女に嫌われるからな。ここが肝心だ」

なぞと例のクリクリ目をあたりの道行く若い女子学生に少々泳がせながら言ったりするのだった。私は気持が分りすぎて思わず吹き出しながらその顔を見た。なぜなら、それまで三十すぎの人物からその種の発言を聞いたことはなかったからだ。二十二の学生にとって、三十すぎの社会人となればそれはもう完全に大人、自分たちとは別種の境地にいるか、ともかく感覚のだいぶ違う落着いた人々、と思ひなしていたのに、どうやらまるでそうではない人もいると知っての驚きである。彼は私の笑いと視線を受けて、さすがに顔を少し赤らめていた。

全学連については、何でも彼は六〇年安保時かその直後の美大の委員長だったのだそう。しかも卒業後は労働運動をするため某中小企業へ意識的に入り、労組を作って書記長になったいわゆる職革^{ジョウカク}だったというのである。それは初めて聞いた時、また別種の意味で驚きだった。なぜなら職革即ち職業革命家は私なぞ当時の学生の一部にとっては、ほとんど英雄と同義のイメージだったからだ。ゆえに、以来、私は多分確実に心のどこかで彼にある種の敬意を持ちだしてもいたと思う。

だが、この頃の現実の彼は、昼は横浜か川崎あたりの電機会社に勤め、夜や休日は彼言うところの「ゲイジツ」活動にいそしむ日々だった。

彼はこう言っていた。

「職革はどうも俺には合わなくてなあ。革命はいいけど、組織って奴がどうも暗えんだよ。いつも深刻に議論したり、ヒソヒソ話ばかりって感じで、ちっとも明るくねえんだ。俺は江戸っ子だからよ、カラツと明るくなくっちゃ好きになれねえんだ、カラツと。そこへ行くとゲイジツはイメージが明るいだろ。パツと輝いてる。だから俺はやっぱゲイジツに戻ったのよ」

といっても、彼のゲイジツジャンルは当時で言うハプニング（その後パフォーマンスと呼ぶようになった）だったから、その活動は要するに次のアイデアを求めて街やら面白そうな場所を徘徊することで、それはある時は誰かのアトリエで開かれた何か目新しいイベント開催のための会議であったり、ある時はハプニング関係者や風変りな美術家宅を訪ねることだったりした。

尤も、たいていの場合、それらの相手は貧乏だったので、通されたアトリエはじめじめ湿った地下室で、目の前をゴキブリが何匹も横切ったりし、決して彼の言うように明るくカラツとした場所とは言いがたかったのだが。それでも時には、他人の庭先に色鮮やかなおもちゃのような手造りの家を建て、中へ入ると頭のつかえそうな部屋から屋根裏へ文字

通り梯子で登り降りする生活ぶりのハプニスト兼画家もいたりしても珍しかったため、私はとにかく彼について歩いた。

そうして、この年の暮には、私は彼と一緒に新宿の劇場の舞台にまで乗っていた。それは当時伊勢丹の斜め向いにあった新宿アートシアターでクリスマス晩から徹夜で開かれた「新宿アートフェスティバル」なるものの一部で、私たちはどういう風の吹きまわしかベトナム戦争の諷刺劇に出演したのだ。呼びかけ人は例の手造りハウスのハプニストらのグループで、役どころはただ行進したりジャングルの中で戦闘の真似事をするだけの米兵だった。今から思えば相当バカバかしい行為だったが、背の高い彼は先頭にたち、一人だけヘルメットの前部に手製の丸ランプまで点滅させて意気揚々と行軍、私もまた仲間をひきつれそのうしろをついて歩いたのだった。

似たことはこの時以外にも、街頭や画廊などで何度か繰返し、私たちはいわば若者の街新宿でのハプニング集団という趣さえあったのである。

けれども、私とコートクさん（といつしか呼び始めていた）との関係は、こういう公的（？）で賑やかな面よりむしろっと私的な点にあったというべきだろう。そうして、それは例のカノジョにも関わる。

ある時、カノジョが予告なしに上京してきたのである。理由は格別ない。試験が終った